



全国でも有数の卓球どころである大阪府。男子であれば古くは興国、現在は上宮と大阪桐蔭、女子は四天王寺、香ヶ丘リベルテの2校が今年のインターハイでタイトルを獲得するなど、全国区の強豪私立高校も多い。その大阪にあって、いわば「普通」の公立高校で奮闘する、20代の監督2人がいる。情熱溢(あふ)れる若き2人が、部活動を通じて伝えたいものとは。

# 大阪の若き2人が伝えたいこと

日本列島が例年よりひと足早い猛暑に見舞われた6月下旬、大阪府内の2つの公立高校にお邪魔した。八尾市にある大阪府立八尾高校と、堺市の大阪府立金岡高校。両校の卓球部に共通するのは、少子化や部活離れが叫ばれる今の時代において、ともに部員数が30人を超す大所帯であること。両校を率いるのは、最若手として大阪高体連卓球専門部の役員も務める20代の2人の監督。大阪でエネルギーシユに奮闘する2人に話を聞いた。

## 府立八尾高校

49人の大所帯、  
週4日の練習で  
3年連続近畿大会に出場

八尾高校は2015年に創立120周年を迎えた歴史ある進学校。卓球部は一時期同好会となっていたが、2016年度に部に再昇格。現在では1年生から3年生まで男女合わせて49人もの部員が在籍する。

卓球部の顧問を務めるのは小川泰司監督。岡山大学卒業後、地元・奈良の高校で講師として1年勤務し、翌年から教諭として八尾高校に赴任。今年度で6

年目になる。

「正直なところ、最初は『卓球を教えたいから』という理由で教員を目指していました。でも、実際に教員になったら教科指導も、担任の仕事も楽しくて、教員という仕事をもっと好きになりましたね」

八尾高校は今年の大坂高校選手権男子学校対抗で7位となり、近畿大会に出場。男子ダブルスでも小谷優斗／箕脇晴大が近畿大会に進んだ。また、昨年度、一昨年度は2年続けて近畿大会女子学校対抗に出場し、女子ダブルスでも中村華／松田悠里が近畿大会への出場切符をつかんだ。

そんな好成績を残している八尾高校だが、驚かされるのは平日に打球練習ができるのは週に2日だけということ。土日と合わせても、打球練習を行うのは週に4日しかない。練習場に置ける卓球台は6台ほどで、大所帯ゆえに1人あたりがボールを打つ時間も限られてくる。



八尾高校・  
小川泰司 監督





Kanaoka High School

# 大阪府立金岡高校

## 高校卓球

そんな環境も小川監督は「どこに異動になっても、『八尾の練習環境でもできたから大丈夫やろ』って思ってます」と笑い飛ばす。練習は部員を半分に分け、前半で打球練習とトレーニングを交代で行う。課題練習と多球練習が中心だが、内容は部員それぞれが考える。課題練習で見つけた苦手な部分を多球練習で鍛え、課題練習で確認し、また多球練習で補強していくサイクルだという。

小川監督は自らの高校時代を「とにかく無我夢中で練習していました」と振り返る。毎日3時間以上は練習に明け暮れたが、それでも目標だったインターハイには出場できなかった。しかし、岡山大学に進学し、練習時間も練習の日数も減った中で、いかに頭を使って、効率良く卓球をするかを考えて練習するようになる。その結果、インカレと全日学に出場することができたが、この大学時代の経験が、八尾高校での指導に活かしていると語る。

「今の練習環境と時間では技術的に飛び抜けることは難しいけど、卓球って考え方次第でチャンスは作れると思うんです。だから戦い方とか勝ち方とか、そういう部分を大切に練習しよう」と話しています。

ウチは進学校ということもあると思います。練習の方法とか理論を少し教えたら、そこから自分で考えられる生徒が多いですね。だから、多くの仕事は努力のベクトルを間違えないように導くことだと思っています」

### 限られた環境だからこそそのメリット SNS活用に大会運営も

も ともとは「楽しくやれたらええな」という雰囲気の部分だったそうだが、次第に選手たちから「もっと勝ちたい」「近畿大会に出たい」という声が増えてくるようになった。そうした選手の気持ちの変化もあり、小川監督の指導にも一層力が入った。

「指導者がどれだけ引つ張っても、生徒にその気がないと意味がないですね。生徒に『やりたい』って意志があつてこそ、指導者の存在意義があるんだと思います。

本当に卓球が好きで生徒なんです。オフの日に練習場が急に使えることになって、『練習したかったら来てええで』って言ったら、ほとんどの生徒が来たり。『なんで予定入れてないねん、オフの日くらい遊べや』とも思いますが（笑）。普段、あんまり練習できないからこそ、できる時にはとことんやるし、やっぱり楽しいですね」

また、中学生に卓球部の活動をアピールし、興味を持ってもらうためにSNSも活用。ツイッターは小川監督が顧問になった時から活



金岡高校・石黒美穂 監督



用しているが、管理を行うのは選手たち。選手からの提案で今年になってインスタグラムの運用もスタート。「提案してきた時にはもうアカウントができてたんで、事後報告みたいなもんですけど」と小川監督は笑うが、裏を返せば、選手の「やりたい」という気持ちを尊重し、信頼している証拠でもある。

他、卓球部として中学生対象のオープン大会「八尾高カップ」も開催し、選手が主体となって組み合わせの作成や進行を行っている。中学生に卓球部をPRするとともに、中学校の教員とのつながりも生まれ、この大会がきっかけで入学した選手もいるそうだ。

「部活として真面目に楽しくやれているので、良い雰囲気できていると思います。欲を言えば、もっと時間も台数も欲しいけど、それがないからこそ『勝つためには今の環境で精一杯やらなあかん』ってことを生徒もよくわかってますよね。

その方向性で近畿大会に出られたんで、今後も頑張ってもらいたいんです」



↑練習場のあちこちで笑顔が見られる八尾高校の練習



↑2人が同時に練習できる3人1組の多球練習。限られた時間の中、大人数で効率よく練習に取り組む



↑特注のユニフォームは小川監督のデザイン。「特注は高価ですけど、そのぶん愛着も湧くんですよ」(小川監督)

# 府立金岡高校

1球にかけて練習した高校時代自身の経験を生徒に伝えたい

続いて紹介する金岡高校は1974年創立の普通科高校。冷房のない体育館3階のスペースにある卓球部の練習場は、夏場になれば熱気に包まれ、選手たちは汗だくになってボールを追う。

練習場に置ける卓球台は3台ほど。3学年の男女合わせて30人以上が所属するため、平日は体育館の練習場だけでなく、校舎の廊下にも卓球台を並べて練習。廊下の窓から西日が差し込む中でも練習に励む。

平日は練習時間を確保するのが難しいぶん、土日をフルに活用。部員を午前・午後の2グループに分け、平日よりも広いスペースで1台に2、3人ほどが入って練習できるようにしているという。

金岡高校を指導する石黒美穂監督は大阪の隣・兵庫県出身。兵庫県立明石南高校時代にインターハイ女子シングルスに出場し、武庫川女子大学で関西学生リーグでもプレーした。高校の教員だった父の姿を見て教員の道を志し、新卒で金岡高校に赴任して今年度で6年目になる。時には石

黒監督もラケットを握って相手をするが、選手にとっては「面倒見の良い姉」のような距離感なのかもしれない。

「私も公立高校で卓球をやっていた、今の金岡よりも練習時間は短かったと思います。高校1年の時は県大会にも出られないようなレベルだったけど、短い時間でも集中して必死に練習した結果、母の支えもあり、高校3年でインターハイに出られた。インターハイ予選の時に『この会場の中で1番集中して、1球にかけて練習してきたのは私や!』って思えるくらいの気持ちで毎日練習していました。

その経験が私の中でひとつ大きな自信になっていきますね。一生懸命やれば、どんな環境でも強くなれることを生徒にも知ってほしいし、経験させてあげたいと思っています」  
柔らかな笑顔の下に、石黒監督のメラメラした熱気が垣間見えた気がした。熱心な指導の甲斐もあって、ここ最近では「金岡高校で卓球がしたい」と入学する選手もいるという。

練習はフットワークに課題練習、ゲーム練習などひと通りのメニューをこなすが、本数をカウン

トしながらのドライブ対ブロックなど、続けることを意識した練習も重要視している。練習場には「ハイ、そこで一本我慢や〜」と石黒監督の声が飛ぶ。

「今って、いろんな卓球の動画が見られるじゃないですか。だから男子は派手なプレーをしたがりですよ。挑戦するのは良い



↑平日は校舎の廊下も活用して練習



ことですけど、今のレベルだとまずはミスが少ないことが重要。だから、我慢して1本でも多く入れる練習は大事にしています。

確かに、退屈な練習かもしれないです。でも、生徒らが「勝ちたい」って言うんで、「なら続けようや、地味な練習から逃げてたらあかんで、勝てへんで」って(笑)」

ちなみに、石黒監督の旧姓は小脇。妹は日本リーグ・百十四銀行でプレーする小脇瑞穂選手で、夫の翼さんは関西卓球アカデミーで指導にあたるプロコーチ。2人とも金岡高校の練習に参加してくれたり、普段も技術的な指導にアドバイスをくれるなど、石黒監督にとっては心強いサポーターとなっている。

### 八尾高校に教えてもらった 「ウチもチャンスはあるんや」

**今** 年の大阪高校選手権男子学校対抗、金岡高校は八尾高校に2-3で敗れた。

その八尾高校が近畿大会まで進んでくれたことは、選手たちにとっても大きいと語る。

「正直、大阪に来るまでこっちの学校は上宮さんと大阪桐蔭さんくらいしか知らなくて。でも、実際に来てみたら『こんなには強い学校あるんや』って思い知らされて、勝つ厳しさも感じています。」

今年の夏も『あと一步』っていう試合ばかりで。でも、2-3で負けた八尾さんが近畿大会まで行ってくれて、『ウチも惜しかったんや、チャンスはあるんや』って生徒も感じてくれたはずですよ。ここから、また頑張ってくれるんじゃないかと思えます」

石黒監督は教員2年目から、推薦を受けて大阪高体連卓球専門部の役員も務める。実は、



学生時代の石黒監督を知る兵庫の教員が「そっち(大阪)で教員なったんで、よろしく頼むで」と大阪の役員たちに連絡してくれていたそう。年々、学校で任せてもらう仕事の幅も増えている中で、役員業務であり、「少し大変ではあります」と語る。それでも、練習場で見せる笑顔には充実感が滲む。

「他の業務もあるので、常に練習に顔を出すことはできませんが、ノートでやり取りをしたりしています。やっぱり、生徒と過ごす中で成長を感じられるのは楽しいし、うれしいですよ。こうやって生徒と関わっていいことは幸せだと思います」



↑ストレート、クロスとコースを変えながら行う「続ける練習」(右写真)石黒監督自身も楽しみながら指導にあたる

➡バックに粒高を貼る異質攻守型の石黒監督。チーム内に様々な戦型がいる中で「勉強の日々です」と語る

### Editor's Postscript

## 2 人の監督が口にした 「続けてくれることがうれしい」

2人の監督に話を聞く中で、共通して語っていた変化がある。それは形は様々であれ、卒業後も卓球を続ける生徒が増えたことだ。

「ここ数年は大学で卓球を続ける卒業生が毎年数人はいますね。体育会じゃなくてもサークルやクラブで続ける卒業生もいます。せっかく卓球をやってきたんだから、卒業後も続けてほしいと思っていたのでうれしいことです」(小川監督)

「大学に入って続けている卒業生もいますし、趣味で卓球を続けている卒業生もいて、『一緒にオープン大会出ましょう』って誘ってくれることもあるんですよ。卓球を好きでいてほしいし、『やって良かった』って思ってもらえることが幸せですね」(石黒監督)

はつきり言えば、両校とも全国上位を目指すようなチームではない。でも、自分たちなりの目標を持って、懸命にボールを追う姿はキラキラと輝いている。

きっと、小川監督と石黒監督も彼ら、彼女らと同じように、卓球に夢中になって学生時代を過ごしてきた。その中でかけがえのない何かを見つけて、今も卓球と向き合っている。だからこそ、教員たちが卓球を好きになってくれたこと、卓球を続けてくれていることがたまらなくうれしいのだと思う。

取材を終えた初夏の夕方、「今日はありがとうございました。ありがとうございました」と言っていて、部員たちが私の横を自転車で通り過ぎていく。汗を滴らせながら、良い笑顔を浮かべて。そんな表情を見て思った。明日の部活も、きっと楽しいだろうな、と。

(編集部・浅野)